

11 医療から訓練、社会参加まで一貫したサービスの提供を目指して

－ 自立支援局と国リハ病院（医療相談室）の連携－

総合相談支援部総合相談課

鈴木理子、後藤幸雄、高橋文孝、菅原美杉、会田孝行、秦明子、木戸晶子

病院医療相談室

上野久美子、金子淑子、飯塚真理、粕谷陽子、酒井陽子、下重敏子、金川愛、篠原あずさ

1 はじめに

自立支援局の利用者募集活動として、前稿（相談課 高橋）で紹介した「5つの広報活動」を平成 23 年度から実施してきたが、伊東重度障害者センター統合に伴い頸髄損傷利用者確保が必要となったことを機会に、改めて第 2 期中期目標に掲げている「入院患者等の障害福祉サービスへの円滑な移行」を図るため、平成 27 年度から国リハ病院医療相談室と連携して行った利用者等確保に向けた取り組みを報告する。

2 連携の取り組み内容

これまでの利用者募集の主な対象機関は回復期病院であったが、高齢患者の率が多く、若年者の確保に非効率であるため、幅広い年齢層の者が受傷後速やかに医療から福祉サービスへ繋がることを目的に、主な対象機関を急性期病院とし①医療相談室と共同による急性期病院等への訪問、②自立支援局事業公開での国リハ病院の紹介を行った。また、③眼科患者や発達障害の疑いのある者に対する相談ルートの確立、④連携による効果等のデータ蓄積を共同で行った。

3 取り組みの結果

(1) 国リハ病院からの利用申請件数が増加したことで、自立支援局全体の申請数が増加した。

【図 1 参照】

(2) 国リハ病院利用に向けた相談件数のうち、46%が訪問による募集活動や事業公開で関わった病院からの紹介であった。

(3) 新たに、平成 29 年度から国リハ病院眼科患者の利用相談の連携を図ったことで、高齢視覚障害者の訪問訓練の利用申請が増加した。

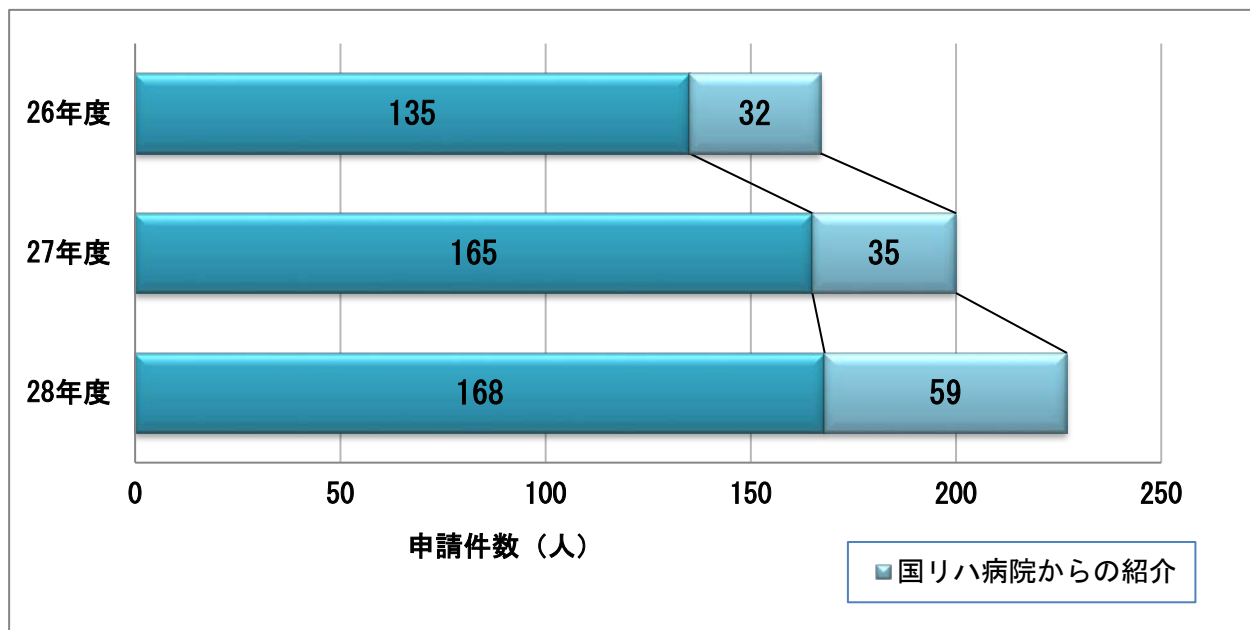
(4) 「言動や行動に何らかの違和感のある利用者への支援フロー」を整え、発達障害の疑いのある者に対する国リハ病院第 3 診療部との相談窓口が確立されたことで、医療的サポートを受けやすくなった。

(5) 機能肢体利用者の受傷(障)から機能訓練利用開始までの期間及び機能訓練終了までの期間をみると、国リハ病院入院歴がある者の方が短かった。【図 2、3 参照】

4 まとめ

国リハ病院との連携により、当センターならではの医療から社会参加までの一貫したリハビリテーションの提供により、受傷(障)から早期に社会参加へ繋ぐ可能性がみえてきた。今後も国リハ病院と協働し、当センターの強みを活かした利用者募集や情報発信に努めたい。

【図1】 自立支援局申請者に占める国リハ病院からの紹介者の推移（平成26～28年度）



【図2】 機能訓練（肢体）利用者の分析（平成21年4月～平成27年7月利用開始者）

国リハ病院 入院歴	人数(人)	受傷(障)から機能訓練利用 開始までの平均期間(日)
あり	29	347
なし	44	697
計	73	△350

【図3】 機能訓練（肢体）利用者の受傷(障)から機能訓練終了までの平均期間の比較【C6～C8レベル】(平成21年4月～平成27年7月利用開始者)

